

ナショナルバイオリソースプロジェクト「カタユウレイボヤ等リソース拠点整備」

第4回運営委員会 議事録

1. 日時 2010年9月25日(月) 16:30-17:30
2. 場所 東京大学駒場キャンパス5号館514講義室
3. 出席者
佐藤 清 (NBRP 事務局長)、平田 裕美 (NBRP 事務局長)、森脇和郎 (NBRP 推進委員)
野中 勝 (運営委員長: 東大)、西駕秀俊 (運営委員: 首都大)、佐藤矩行 (運営委員: OIST)、長濱嘉孝 (運営委員: 基礎生物学研究所)、山崎由紀子 (運営委員: 遺伝研)
稲葉一男・笹倉靖徳 (筑波大)、赤坂甲治 (東大)
4. 議題
 - (1) 平成21年度実績報告
 - (2) 平成22年度進捗状況
 - (3) 実費徴収
 - (4) ヒアリング
5. 議事

(1) 平成21年度実績報告

1) 筑波大学の平成21年度業務の実施内容について説明があった。系統の収集は目標値の20系統に達したこと、93系統の保存業務を行っていること、第3回の運営委員会で指摘された過酸化水素水の導入について2名で行うことにより事故防止対策を施したこと、系統の一つが遺伝的に弱いため飼育の負担が大きいため保存を中止したこと、5系統の精子を凍結に回したこと、のべ提供数が目標の10回を超え18回に達したこと、MTAを10件締結したこと、本リソースを扱った論文が6報発表されたこと、データベースCITRESに8種類の系統情報を追加したこと、カタユウレイボヤ純系業務を京都大学より引き継ぎ自家交配を9世代進めた近交系が維持されていること、が報告された。凍結精子をどのように個体に戻すのかについて質問があり、野生型の卵と掛け合わせるとの回答があった。発表論文の収集について質問があり、収集はユーザーからウェブシステムやメールを通じての登録を呼びかけていること、フィードバックはあること、それらに加え、実施担当者がホヤ論文をチェックして情報を収集し、ほぼ全ての論文を収集できていることが説明された。

2) 京都大学の平成21年度業務の実施内容について説明があった。野生型は京都大の舞鶴水産試験場で養殖をしていること、年に2回、宮城県女川産の野生集団からの子孫を入れることにより遺伝的多様性を保っていること、のべ提供数は21,785匹で目標を超えたこと、

18 機関 19 研究室、251 回の送付があったこと、オンラインでの注文システムを構築し運用したこと、純系業務について、自家交配 9-10 世代のものを筑波大と東大に発送したこと、が報告された。

3) 東京大学の平成 21 年度業務の実施内容について説明があった。カタユウレイボヤ野生型は提供件数 28 件、提供個体数 1,150 匹であったこと、京大から純系の業務を引き継いだこと、ウミシダの提供件数が 13 件で、成体 70 匹程度、幼生 700 匹程度の提供があったこと、ニッポンウミシダゲノムがアメリカの Brown 大学で解読が進められていること、が報告された。

(2) 平成 22 年度進捗状況

1) 東京大学の平成 22 年度業務の進捗状況について説明があった。カタユウレイボヤ野生型は提供件数 69 件、提供個体数 4300 匹であること、ウミシダの提供件数が 6 件で、提供個体数 83 匹であること、カタユウレイボヤ純系業務は強い純系を作ることを進めている、ことが説明された。カタユウレイボヤ野生型の数と提供件数について質問があり、提供実績にならない拠点（筑波大学）への提供数を含んだ数であることが指摘された。強い純系を作る工夫について質問があり、野生型から独自に系統を作っていること、また丁寧に育て過ぎない工夫をしている、また京大から引き継いだ純系も維持を継続しているとの回答があった。純系の世代数について質問があり、継代世代数は不明であるとの回答があった。ニッポンウミシダの集団について質問があり、近交系ではなく closed colony であるという回答があった。ユーザー数の季節変動について質問があり、季節変動はある（8-9 月は閑散期となる）との回答があった。

2) 京都大学の平成 22 年度業務の進捗状況について説明があった。のべ提供数は 11,480 匹、18 機関 19 研究室、91 回の送付があったこと、提供先が固定されて来ていること、現在の業務担当に加えて 1 名雇用予定であること、が説明された。近交系、野生型、純系という単語の使用について混乱を招く可能性の指摘があり、京都大学で取り扱っているのは野生型と呼ぶべきであることが確認された。

3) 筑波大学の平成 22 年度業務の進捗状況について説明があった。系統の収集が 16 系統に達していること、109 系統の保存業務が行われていること、99 件の提供があったこと、MTA を 82 件締結したこと、提供実績が多いことについて 1 ユーザーに 76 系統を提供したためであること、本リソースを扱った論文が 2 報発表されたこと、純系業務について、近交系 T 系統が自家交配 11 世代、Y 系統が 9 世代まで進んでいること、T 系統は入水口と出水口がクロスする表現型を示すこと、が説明された。T 系統の入・出水口のクロスが何世代目から確認できたかについて質問があり、具体的には分からないが今年度になってから気

づいたので最近の事であろうと回答があった。

(3) 実費徴収

1) 実費徴収システムの導入について説明があった。実費徴収は筑波大学で一括して進められていること、分担機関にはリソース送付に必要な経費の概算を上乗せした額が分担金として配分されていること、クレジットカード決済システムの運用については、カタユウレイボヤトランスジェニック系統については導入が終了しており 8 月から運用されていること、ニッポンウミシダとカタユウレイボヤ野生型については構築中であること、が説明された。料金の内訳について、その妥当性（ユーザーが高いと感じているかどうか）と、送付プロセスに関わる人件費を計上していないことが説明され、運営委員からユーザーは金額は妥当であるという感想を持っていること、人件費の今後の上乗せについてもユーザーに対して丁寧に説明すれば理解は得られるとの回答があった。これを受けて、平成 23 年度からの運用を目標に価格変更し、送付に関する人件費を計上することを計画することが確認された。クレジットカード決済システムの使用状況について質問があり、8-9 月は野生型が使用できないことに伴い使用頻度は 1 件のみであったが、今後増加する予定であるとの回答があった。

(4) ヒアリング

1) 10 月から本事業についてヒアリングがあること、10/18 日までにヒアリング資料を作成する必要があることが説明された。配布されたたたき台を元に資料作製について質疑応答があった。以下に列挙する。

- ・カタユウレイボヤ純系がどのような役に立つのかについて質問があり、変異を導入しての **positional cloning** に使えること、カタユウレイボヤ野生型集団が多型を多く有しているため、**morpholino binding site** にも変異があり効かないことがあるため、純系ゲノムを読んで配列情報を開示することによりその問題点を解決できること、現在の野生型のほとんどの使用目的に対して純系を使うことができることが説明された。純系のゲノム配列の解読には、(純系の整備が整った段階で) NBRP のゲノム情報等整備プログラムに応募する予定であることが説明された。

- ・ユウレイボヤ *Ciona savignyi* が事業に含まれていないことについての質問があり、世界規模で普遍的に入手でき研究に使われているのがカタユウレイボヤ *Ciona intestinalis* であること、ゲノム配列情報の整備がカタユウレイボヤの方が進んでいることが説明された。また国内でユウレイボヤを使っている研究室が 2 つ程度であることが指摘された。

- ・ウミシダについて、カタユウレイボヤや棘皮動物で主として材料に使われているウニ等

とは異なる特性を持つことを強調する必要があることが指摘された。

- ・ウミシダのユーザー数が問題となるため資料作成の上で対策が必要であること、運営委員会からのサポートを得ることの重要性が指摘された。
- ・コミュニティの規模を把握しておくことの必要性が指摘された。
- ・筑波大学の資料内容について、具体的数値目標を加える必要性が指摘された。
- ・本事業の必要性について、ユーザーからの意見を聞くためのメールを送信することを検討しているとの説明があった。
- ・ユーザーの意見を集約する必要性、重要性が指摘された。
- ・NBRP メダカの例について説明があり、ユーザーの規模はホヤの 10 倍程度あること、新しいユーザーが着実に増えており、その方面からユーザーの要求を集約できていることが説明された。

(文責：野中 勝)